

# Cecilia Bartoli



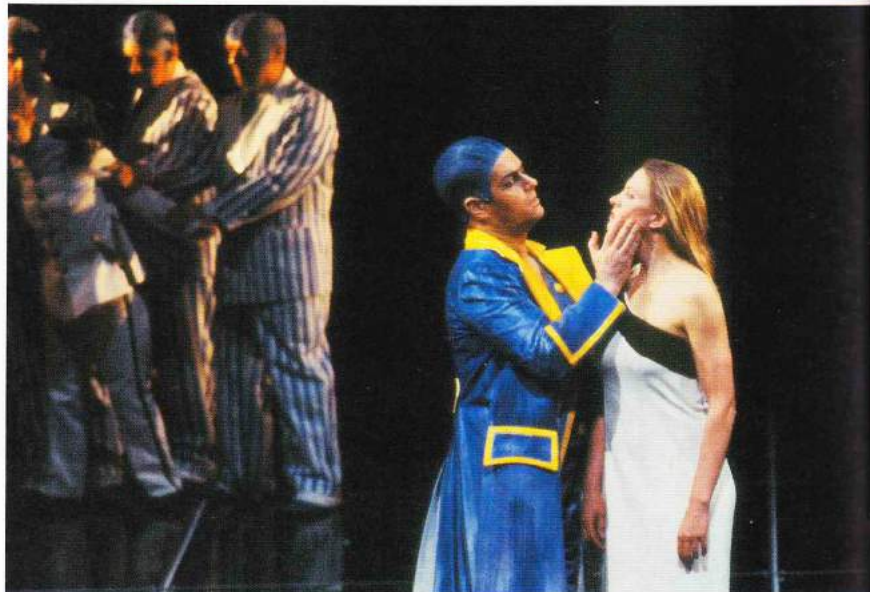
侍女に変装してジューリオ・チャーザレを誘惑しようとするクレオパトラ(C.バルトリ) ©Suzanne Schwiertz

## 《ジューリオ・チャーザレ》 プレミエレポート

取材・文=中 東生(在チューリヒ)  
Text=Shtinobu Naka

まず指揮のミンコフスキの激しい指揮ぶりに驚かされたが、音楽的には素晴らしく、壮大なテーマに負けずドラマティックに運んでいった。その成功の大きな要因の1つは、素晴らしい古楽器奏者が集められたこと。リュートの今村泰典による繊細な音色が耳に心地よかった。ただエジプト人が登場するたび、ディズニーランドを連想させるふざけた装置・衣裳が、音楽とドラマが織りなす緊張感の持続を妨げていた。

歌手陣では、23歳とは信じ難いF.ファジョーリのジューリオは、舞台での動きがややごちなかつたが、高度なテクニックで安定感ある歌唱を聴かせた。最後のアリアでは、若干の疲れを感じさせたが、初めて挑むこの大役を堂々と歌い切った。今回のクライマックスは、第1幕最後のコルネリアとセストの二重唱だ。セスト役のA.ボニタティスは、正統的なバロック唱法のテクニックで、数回高音が絶叫ぎみになった以外はほぼ完璧。コルネリア役のC.ヘレカントは、美しく凛とした出で立ちで、このオペラの女王のような風格だった。イタリア語の母音が浅く、感情が高まったレチタティーヴォでは、耳障りな箇所もあったが、この2人が自分たちの運命を嘆いて、永遠の別れを告げる母と息子を好演した。最後にスター歌手C.バルトリ。元々メゾソプラノの彼女の声の暗い響きが、クレオパトラのイメージにピッタリで、コロラトゥーラの超絶技巧はお手のものの彼女にとって、この役は将来当たり役になっていくであろう。今回が同役デビューになるが、すでに完全に自分のものにしていった。最後のアリアでは、持ち前のテクニックで圧倒し、カーテンコールでは、いつものように太陽のようなオーラで会場中が沸いた。ただ演出家(C.リエヴィ)の意向であろうが、コケティッシュの限界を超えた演技には疑問が残ったが。(4月2日)



《ジューリオ・チャーザレ》より。コルネリア(C.ヘレカント)の美しさに魅かれるエジプトの將軍アキッレ(A.ユーイング)、彼女の息子セスト(A.ボニタティス)は衛兵に引かれていく(奥)  
©Suzanne Schwiertz

